



読者手記
大久保淳一さん
(47歳)

●プロフィール
1964年生まれ。大学院修了後、国内メーカーに入社。1999年シカゴ大学MBA卒。1999年より現在までゴールドマン・サックス証券に勤務。フルマラソンは30回以上完走。サロマ湖100kmウルトラマラソンは4回完走。夫人と2人の子どもと暮らす

生存率20%の闘病生活とフルマラソン復帰、ランナーであり続けた5年間

率丸がんと難病の肺線維症を克服し、今年4月のかすみがうらでフルマラソンに復帰。現在は来年のサロマ湖完走を目指す大久保淳一さんが、発病からの5年間を綴った

「がんが、腹部、肺、首に転移しています。最終ステージのⅢBと診断します」2度目のがんの告知は、呆気なく伝えられた。4日前に、率丸がんと手術を終えたばかりの朝のこと、全身から血の気が引いた瞬間だった。「どうしよう……でも、闘うしかない」話を3カ月前に戻そう。2007年2月。私は、5度目のサロマ湖100kmウルトラマラソン完走に向けて故郷で週末トレーニングをしていた。そこは練習の鬼で、次のフルマラソンは3時間15分が目標だった。そして山道での練習中、大怪我をする。右足首の三角靭帯を断裂し、外果骨は半分折れていた。救急で東京に戻り5時間に及ぶボルト接合手術。「これで、今

年のサロマはなくなった」と落胆した。しかし手術後、意外なことに気づいた。率丸の一つが小石のように硬くなったのだ。とつさに「もつと大変なことが身体の中で起こっている」と悟った。恐ろしくて身震いした。医師たちの緊迫した雰囲気は、ひと通りの検査が終わる、診断を聞いた。「精巣腫瘍です。来週、摘出手術を行います」全く予期せぬがんの告知にひどく混乱した。病気だとは覚悟していたが、がんとは思いもよらなかった。精巣腫瘍(率丸がんと)は悪性度が高いがんで、自転車選手のランス・アームストロングが闘った病気であった。正に暗澹とした気分だった。私は、毎月250km走り、毎年人間ドックで

問題ないと言われてきたランナーだ。「何かの間違いだ」必死で否定し葛藤した。しかし、家族にも伝えねばならなかった。「パパ、がんになったんだ」と家族が動揺するなか、摘出手術は無事終了した。摘出後の病理検査で、私のがんは3種類のがんが混在する治りにくいものであることがわかった。そしてその日、伝えられたがん転移の事実。衝撃的だった。私のがんは致命的な部位までおよんでいた。腹部、肺、首。5年生存率は49%。それでもサロマ湖を4回も完走できた自分は生き残れると根拠もなく信じた。ただし、生存してもその後の人生は坂道を下るようなものになるだろうとも思い絶望した。マラソンどころではない。

始まった化学療法はさすがに苛酷だった。抗がん剤は、がん細胞と同時に正常細胞も死滅させる薬だ。そして、強烈な副作用が始まった。私は、ベッドの上で、胎児のようにうずくまり、激しい吐き気と闘った。耳鳴りと高熱にうなされ、初日は目を開けているのに何も見えず、看護師3人に抱きかかえられてトイレにいった。たまらなかつた。ただただ涙が流れ出た。全身の毛がなくなり身体中に黒い斑点ができた。しかし、確実に効果を示し、腫瘍マーカーの値は下がり続けた。

必ずやフルマラソンに復帰する

そのころ、私を支えていたのはアームストロング選手の偉業だった。彼は

中治療室にいたのだ。2日過ぎたが全く身体が動かない。懸命のリハビリを毎日続けた。そしてついに最高のニュースが届く。「切除した腹部リンパのがんはすべて壊死していた」との報告だった。うれし涙があふれた。1カ月後退院し、自宅に戻ったがトボトボとしか歩けず、老人がようやく生きているかのようなであった。早くウォーキングでもしたかった。しかしこの後、大変なことが起こる。

生存率20%、過酷な状況が続く

実はそのころ、抗がん剤による合併症で肺線維症も患っていた。治療困難な「難病」である。急性憎悪して数週間で死亡という症例も多くある。生存

率20%以下という数字には、表現のしよのない恐怖感があった。そして10月、その急性憎悪が起こる。一日中、ケンケンという咳が出て、明らかに呼吸困難になっていた。いっそ死んでしまつた方が楽ではないか?と思える程辛かった。肺活量は54%まで落ちた。マラソン復帰は絶望的となる。はたして普通の生活に戻れるのか?生きられるのか?といった危険度なのである。医師たちは全力で私を救おうとしてくれた。あらゆる薬を投与し、私の命をつなこうと懸命だった。明日にでも息絶えるのではないかと不安だった。まともに息が出来ないのだから毎日、死が怖くて泣いていた。

懸命な治療が続いた。そして、今でもあの瞬間を覚えている。先生が検査結果を持って病室に駆け込んできた。「大久保さん、改善しているよ!」。その瞬間から大きく運命が変わる。入院してから既に10カ月が過ぎていた。何とか命が繋がった瞬間だった。

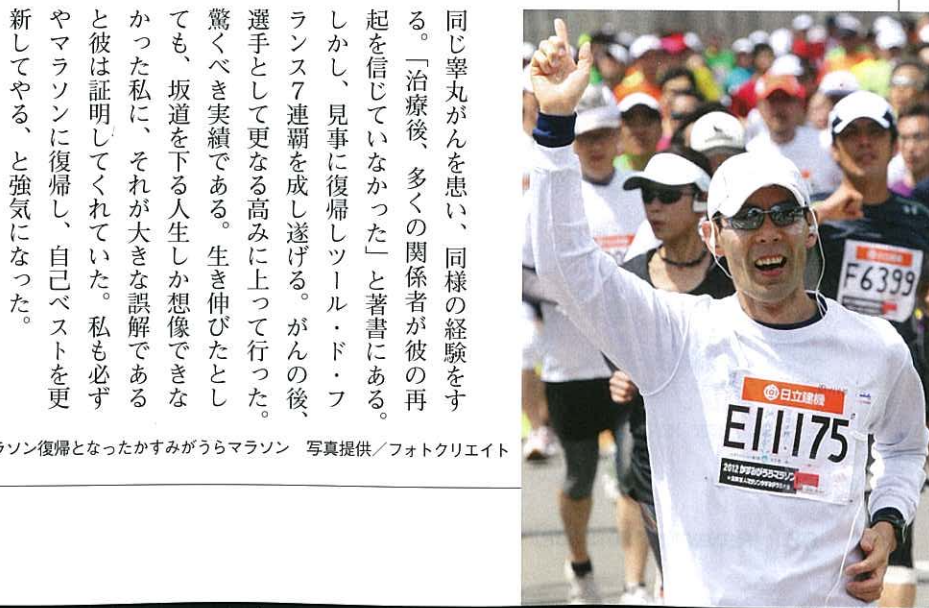
在宅治療に移ったが、家では寝たきりの生活だった。多少体調のすぐれる日に散歩に出ても、信号が変わるまでに横断歩道を渡り切れない。みじめだった。常に身体中が痛かった。2009年、がん発症から既に2年半が経っていた。しかしいまだにジョギングすらできていない。この身体はどうなったんだ!と自分を責めた。翌年、ようやくジョギングらしきものを再開してみた。わずか5kmを1時

間もかかった。肺線維症で肺機能の3割を失っていた。いくつかの臓器もない。ハンディキャップからの再スタートである。秋、試しに八ヶ岳縄文の里マラソン大会でハーフに参加した。何とかなるのではないかと甘い考えのもと走ってみたが、到底おぼつかなくかつた。21kmをへろへろになつて3時間以上歩いただけのことだった。「最終ランナー」という車が背後につき、私が通過するたびに大会関係者が仕事を終えて行った。情けないレースだった。病前は、1時間半で走れたのに。片付け中のゴールを一人くぐった。悲しかった。やはり、マラソン復帰なんて無理な身体なんだ、と。

病気を力に変えなくてはならない

さらに漫然と時間が過ぎ、2011年。不吉なことに腫瘍マーカーが上がつていった。生きた心地がしなかつた。再測定し、結局正常だったが、抗がん剤治療中の闘志が蘇った。「病気を力に変えなくてはならない」フルマラソン復帰という大目標も蘇った。肺機能の一部を失っているが、それでフルを完走できた大きな自信になる。

それからは映画「ロッキー」のように練習に練習を重ねた。春には皇居コースを走れるまで身体が戻つた。昔の練習日誌を読み返した。毎月走行距離を延ばした。ついには15km走ができるようになった。7月には何と130km走つた。すごい勢いで練習しているのが



今年、フルマラソン復帰となったかすみがうらマラソン 写真提供/フォトクリエイト

距離からわかつた。しかし、何かしつくりこない。身体が思ったように戻らない。栓の抜けた風呂に一生懸命水を貯めているような感じである。3年間50種類以上の薬を投与した。薬により救われ、薬により破壊された身体だ。だから何が違う。それでも再び走れていることが幸せだった。なぜなら、つい最近まで横断歩道を渡りきれない患者だったのだから。

そして10月、諏訪湖マラソンのハーフに参加した。その日2時間30分をなんとか切つてゴールした。大会的には制限時間ギリギリの1ランナーだったが、私にはがん4年後の偉業だった。これでマラソン復帰がグッと現実的になった。12月も、1月も、2月も復帰だけを考へて過ごした。がんと肺線維症を患い生存率20%の中を生きている自分が、また走れる気がしてきた。人生のスタートラインに戻りたい。その思いで懸命にトレーニングした。3月、ついに200kmを走り込んだ。

そして2012年4月15日。私は友人の安藤君とかすみがうらフルマラソンをゴールできた。走っている4時間49分の間、あの5年間のことを思い出すことはなかつた。ただペースの計算ばかりしていた。普通のランナーなら誰もがするように。とても普通のマラソンだった。これをずっと望んでいた。そして今、目標がある。サブスリーとサロマンブルー。そのスタートラインに立つことができた。

がん病棟の病室、家族やランスの写真、そして自分自身を支えた数々の言葉

